あらすじ

筑紫奥（つくしのおく）

年貢を納めるために都へと向う奥筑紫と丹波国の百姓は道中行き合い、同道することになります。

さて、ともに年貢を無事に納め、奥筑紫の百姓が唐物（中国の渡来品）を、丹波国の百姓が柑類（果物）をそれぞれ納めたと、その品々を数え上げて奏者（取次役人）に報告します。

さらに万雑公事（諸雑税）を免除された二人は大いに喜び、ともに声をあげて大笑いしますが、それを奏者に咎められ、それぞれ自分の耕作する田一反につき一笑いせよと命じられて…。

田村　替装束（たむら　かえしょうぞく）

春爛漫の都清水寺。童子が清水の春景色を愛でつつ現れ、桜の下を掃き清めます。

自分はこの清水の花守、宮人だと名乗る童子は、旅の僧に請われるまま坂上田村麿が創建したという清水寺の来歴を語り始めます。

かつて大和国、子島寺の賢心という僧が木津川の川上に金色の光が射すのを見て川上に向うと、そこには一人の老人がおり、賢心に檀那（施主）を待って大寺院を建立すべしと言って飛び去ったといいます。老人は実は観音菩薩の化身で、檀那とは田村麿の来訪を予言したものだったのです。

また童子は僧にこの辺りの名所を教え、二人は華やかな都の春景色にしばし眺め入ります。僧に名を問われ、童子は自分の帰る方を見よと答えると、田村麿を祀る田村堂の内陣に消え失せてしまうのでした。

〈中入〉

やがて夜が更け、花の木陰で法華経を読誦する僧の前に勇壮な甲冑姿の田村麿が現れると、伊勢国、鈴鹿山討伐の戦語りを始めます。

平城天皇の御代、田村麿は鈴鹿山への出陣に際し、清水の観世音に参詣して戦勝祈願をします。いざ田村麿が鈴鹿山へ入ると、天地に鬼神の声が轟き、やがて黒雲を吐きつつ鉄火を降らし、鬼神が姿を現します。数千騎に身を変じたその様は、さながら山のように見えるほどでした。

しかしそこへ千手観音がまばゆい光を放って示現すると、その放つ千本の矢にことごとく鬼神は討たれ伏したのです。

田村麿はそう仕方話に語ると、観音の利益を讃えて消え失せるのでした…。

「替装束」の小書（特殊演出）がつくと、謡や型に細かく変化がある他、前シテが童子姿から喝食姿となり、後シテも面が平太から天神に、装束が法被肩脱ギ姿から唐冠、黒頭、狩衣の肩上ゲ姿に変わって剣を背負うなど、より軍神としての性格が強調される演出となります。